

『雲玉和歌抄』に於ける『蒙求』の「楚莊絶纓」受容の一側面  
— 『関八州繫馬』との比較を通して—

二階 健次

*Sosozetsuei in Mogyu of reception by the comparison of one side Ungyoku-Waka-Sho to Kanhasshutsunagiuma*

NIKAI Kenji

**Abstract**

This paper considers the significance of the creativity of *Sosozetsuei*, which is the subject of *Mogyu* in *Ungyoku-Waka-Sho*. The method is to compare *Ungyoku-Waka-Sho* and *Kanhasshutsunagiuma*.

*Ungyoku-Waka-Sho* is a collection of medieval Waka by a poet priest of unknown origin Noso-Junso, and *Kanhasshutsunagiuma* is a Ningyo Joruri's work by Chikamatsu Monzaemon. *Sosozetsuei* is the narration which was well known in Japan.

The lyrics of *Ungyoku-Waka-Sho* are modified from *Mogyu*, which should be the authority, and a phrase of *Wakan-Rōei-Shū* is inserted. In the first half of the story, *Sosozetsuei* was originally adapted and inserted, and it is a turning point that develops into the Tsuchigumo Battle in the second half. The story is made interesting by the ingenuity of Taira-no-Masakado, who is based on *Zentaiheiki*.

Interpreting the lyrics of *Ungyoku-Waka-Sho* from using the ingenuity of this new work as a clue, reveals the meaning of adding *Wakan-Rōei-Shū* which quotes a sentence of *Gokansho*. It is based on the doctrine of the vassal's departure and retreat in the relationship between Bunkou in Shin-country (Juji) and Kyuhan.

The Sakura-Kadan which was added to this story, was held at Chiba Katsutane in Motosakura-Castle. This castle enshrines Masakado-Jinja, and Taira-no-Masakado is a common recognition of the princely relationship for Chiba clan. In other words, *Sosozetsuei* preached the importance of princely relations, and *Wakan-Rōei-Shū* how to treat the samurai. The castle of Chiba Katsutane was under wartime due to internal and external anxiety, and the unity of the clan was required.

Noso-Junso tried to tighten the vassals of Chiba Katsutane by incorporating the image of Taira-no-Masakado into *Sosozetsuei*.

**Key Words**

Noso-Junso, Ungyoku-Waka-Sho, Mogyu, Sosozetsuei, Taira-no-Masakado, Kanhasshutsunagiuma



## 目次

- 一 はじめに
- 二 『雲玉和歌抄』の「楚莊絶纓」の解釈
- 三 『関八州繫馬』と平将門
- 四 平将門と『雲玉和歌抄』
- 五 おわりに

## 一 はじめに

既に周知のことであるが、中国から伝来した人物故事集の中に唐代の李瀚撰になる『蒙求』がある。本書は子供に歴史の故事を記憶させる為に作られた童蒙書で、四字一句の韻文二句で対をなし、日本では平安朝に渡来し、『宝物集』に「勸学院の雀は蒙求を囀る」とあるようによく読まれた。室町期の東国に「坂東の大学」といわれた足利学校が建てられたが、そのの漢籍講義に使用された記録(注1)がある。江戸期には「何々蒙求」といわれるものが多く出版され、故事成語の元版として人々に好まれた。和歌では、蒙求を題にして詠むことが行われ、その題を蒙求題という。本論は『蒙求』の一つ「楚莊絶纓」の解釈に、平将門が与えた影響を軸に、衲叟馴窓が『雲玉和歌抄』(以下、『雲玉抄』という)(注2)で施した創意の意味について考察する。そのために出詠された和歌に添えられた詞書と近世浄瑠璃の『関八州繫馬』(以下、『繫馬』という)(注3)に翻案して取り込まれたものとを比較検討してみることとする。

『雲玉抄』は永正の乱の只中、永正十一年(一五一四)下総国の本佐倉で編まれた、出自不明の歌僧・衲叟馴窓(注4)による私家集である。衲叟の蒙求題は「二百首題のうち」、「蒙求題から鶯によせて」、「蒙求題のこころを申せし」というように定数歌や日次歌会に自身が

蒙求題を十二撰び、出詠している。その構造は先人の源光行が元久元年(一一〇四)に編集した『蒙求和歌』にみるように、「標題、説話文、和歌」の三部分で一つの蒙求題を構成している。その説話文は『蒙求』(正しくは李瀚『古注蒙求』であるが本論は『蒙求』で通す)を基本とするが原本の和訳ではなく、かなり自由な改変が行われている。「その心を申せし」等とあるように、時代状況を踏まえ、詠われた人物の心理状況を理解して出詠したためと思われる。従って、それは『蒙求』や先人たちの『蒙求和歌』や『唐物語』の和歌とは違った精神が表出している。「楚莊絶纓」はその一つである。

『繫馬』は、近世の上方文学を担った近松門左衛門の最晩年の人形浄瑠璃である。源頼光とその兄弟、家臣である四天王が活躍する時代の一つで、その前半部にこの故事が翻案撰取されている。そこには騒乱の最中の、東国武士によるローカルな歌会での解釈と天下太平の世の、上方文学の解釈の比較から、共通して底流する東国武士像が浮上してくる。それは平将門である。

「楚莊絶纓」は古くから本朝文学に受容されてきた。この中国故事が将門という東国武士を照射すると、どのような意識の変化が起きたのか、物語の構成から探ってみる。本論は和歌世界の蒙求受容と近世浄瑠璃世界の蒙求受容の相違点を検証するものであるが、中世と近世の時代性(共通としての武士と相違としての時代)、中世歌人・衲叟馴窓と近世作家・近松門左衛門の個性の違い(共通としてのドラマ性と相違としての構成員)が論点となるだろう。

## 二 『雲玉和歌抄』の「楚莊絶纓」の解釈

まず、『雲玉抄』がこの蒙求題をどのように解釈したか見てみる。

楚莊絶纓のこころを申せし

終にその君がこころにかけおびのなさけの末をおもひしらずや

莊王、男女交りて酒宴の夜、俄に灯消えぬ、咎犯といふ人、后の

御手をとる、かれが冠をとらせ給ひて王に宣ふやう、火をめして冠きざらん物をとがめあるべしとあり、みかど、くらきうちになかぶりぬぎていだせとて後、火をめしておのにおの返し給ふとなり後、晋の軍兵おこりて楚の内裏を夜うちにす、官軍ちりぢりになりぬ、咎犯ひとりどまりて命をすてふせぎたたかひ晋軍おしかへし天子をたすけ申せし、みかど忠賞行はれしに、以前御恩にあづかると辞し申せし、こころは冠の時の事なり、纓はかけおびとよめり、冠のをなり、**朗詠に、咎犯罪謝文公、逡巡河上**（『雲玉抄』四五二）

これは千葉勝胤主催の歌会の蒙求題のうち「楚莊絶纓」に出詠した納叟馴窓の自詠歌である。『雲玉抄』は出詠した和歌とその自注とで構成され、長い詞書や左注を付すものがあるが、これもその形式を踏襲している。『雲玉抄』雑部に、同じ蒙求題の「宿瘤採桑四五〇」とが他の蒙求題からは独立して並置されている。ともに君臣関係がテーマであることから、テーマ性の違いによって他と離されて配置されている。また、後述する『蒙求和歌』が「恋部」に収めているのに対し、『雲玉抄』が「雑部」であることも納叟馴窓の意図が「恋」ではなく「君臣関係」であったことを覗わせる。さらに左注については『蒙求』の解釈とともに「咎犯」（注5）という人物説話が融合した二部構成で、前半部が『蒙求』の「楚莊絶纓」を意識したもの、後半部が「朗詠に、咎犯罪謝文公、逡巡河上」という『和漢朗詠集』述懐からの引用である。

前半部の故事の題意は「宴席の燭光が消えた間で、美人の袖を引いた者がある。女はその者の纓を切つて犯人を捜そうとしたが、王は出席者全員に纓を切らせて犯人を救った」というものである。『蒙求』の「楚莊絶纓」の原文は次のとおりである。

説苑楚莊王賜群臣酒。日暮酒酣、燈燭滅。有引美人之衣者。美人援絶其冠纓。告王、趣火視之。王曰賜人酒使醉失禮。奈何欲踴婦

人之節。而辱士乎乃令群臣皆絶去纓而上火。盡懼而罷。後晋与楚戰。有一臣常在前却敵卒勝之。王怪問。乃夜絶纓者也（『蒙求』三七六）（注6）

冒頭に『説苑』と典拠を明らかにしている。『説苑』は次のとおり。

楚莊王賜群臣酒。日暮酒酣、燈燭滅。乃有引美人之衣者。美人援絶其冠纓、告王曰、今者燭滅、有引妾衣者、妾授得其冠纓持之、趣火来上、視絶纓者。王曰、賜人酒、使醉失礼、奈何欲踴婦人之節而辱士乎、乃命左右曰、今日与寡人飲、不絶冠纓者不懼。群臣百有余人、皆絶去其冠纓、而上火、卒尽懼而罷。居二年、晋与楚戰、有一臣常在前、五合五獲首却敵、卒得勝之。莊王怪而問曰、寡人德薄、又未嘗異子、子何故出死不疑如是。对曰、臣当死、往者醉失礼、王隱忍不暴而誅也。臣終不敢以蔭蔽之德而不顯報王也、常願肝腦塗地、用頸血湔敵久矣。臣乃夜絶纓者也。遂斥晋軍、楚得**以強。此有陰德者、必有陽報也。**（『説苑』三十二）（注7）

『蒙求』注は『説苑』を踏まえているが、故事からは「筋のみ」を踏襲している。『説苑』の趣旨は「此有陰德者、必有陽報也」の一文に込められている。「陰徳ある者は必ず陽報有り」つまり「ひそかに徳を施す者には明らかな報いがある」というのがこの故事の本旨である。君主が密かに恩情を賜れば、家臣は命を懸けて報恩する。おかげで莊王は春秋五霸の一人、中原の覇者になれたという史実が暗示されている。この「楚莊絶纓」は本朝においてよく知られた説話で、中国の『蒙求』（天宝五年（七四六））を踏まえて、『唐物語』（十二世紀後半頃成立）、『蒙求和歌』（元久元年（一一〇四））、『十訓抄』（建長四年（一一五二））、『古今著聞集』（建長六年（一一五四））等に引用をみることができ、それは以下のとおりである。

昔楚莊王と申人：かかれども、この人「いかにしてかあるじの

なさけをむくひたてまつらん」と心のうちにおもへけるに、あるじかたきのくににせめられて、あやうきほどにおはしけるを、この人ひとり身をすててたたかひければ、『唐物語』第二十二(注8)

楚の莊王、よき人を集めて、酒を勧めて遊び玉ふに、灯の風にきえたる隙を得て、御傍……心一にこそ思ひしりにけれ、其後に晋の軍、楚を囲むこといくへと云ふ教を知らず、楚の軍の中にただ壹人、ほこをあげて抜出でて鬪ふものあり、即ち晋の軍を破りつ、王、奇しみ問ひ玉ふに、当初に後の纓を取られたりし人なりけり、身を捨て、王の情けを思ひしりにけり(『蒙求和歌・平仮名本』(注9))

疑ひ犯すところの咎、なほきはめずして、その疑ひ残らむ輩におきては、君のため、世のため、させる苦しみあるまじくは、□付きてその罪をなだめ、軽めむこと、ひとへに徳政なるべし、あまねき慈悲なるべし。楚国の王の纓をまぎらかして、臣下のとがをかくし給けん、世にこえたる御なさけなりけり(『十訓抄』巻第十一「才芸を庶幾すべき事」の七十六)(注10)

およそ君と臣とは水と魚のごとし。上としてもおごりにくまず、下としてもそねみみだるべからず。もろこしには楚の莊王と申君は、寵愛の後の衣をひく物をゆるして情をかけ……(『古今著聞集』卷八「好色第十一の三三一」後嵯峨天皇、なにがしの少将の妻を召す事)(注11)

君主の徳は政において慈悲を施すこと、臣下とは「水魚の交わり」であり、一体化した君臣関係を築くとする。いづれも「君主の「恩情(なさけ)」が決め手としている。さらにこの蒙求題には以下の和歌が添えられている。

情けなき言の葉ならば今日までも露の命のかからましやは(『唐

物語全釈』第二十二)

タレトシモワカヌナコリノトモシヒロココロニキヘヌサケナリ

ケル(『蒙求和歌・片仮名本』)

たれとしもわかでやみにし灯の心にきえぬなさけなりける(『蒙

求和歌・平仮名本』)

これら添え書き、和歌のすべてに「なさけ」の用語が使われているのがわかる。つまり、本朝における「楚莊絶纓」の解釈は「君主の情け、恩情」がこの故事から引き出されて主テーマは「情」なのである。一方、臣下にとっては「報いる」「思い知る」との表現があり、そのことから、武士が一身に刻み付けて恩に報いようとする「報恩」であるとみてよいだろう。つまり、これまでの本朝における受容形態を踏襲して、衲叟馴窓は『雲玉抄』四五二に「なさけの末をおもひしらずや」と歌句を添えたことは間違いない。

### 三 『関八州繫馬』と平将門

このように衲叟馴窓以前の享受については、仏教説話の中や、蒙求和歌の詞書、歌物語的なものの中に、儒教に基づく教えや報恩に重点が置かれ、その教えを引き出すための伏線として「楚莊絶纓」の故事が引用されていることは明らかである。一方、衲叟馴窓以後の享受としては浄瑠璃に取り込まれているのを見ることができ。

近松門左衛門は江戸時代前期—中期に活躍した浄瑠璃作者である。晩年、「代々甲冑の家に生れ」と記すように、越前の武士の出である。武家に題材を得た時代物を多く手掛け、武士の意地、武士の大義をテーマにする。その彼の最晩年の作品に『関八州繫馬』がある。享保九年(一七二四)一月、大阪竹本座で上演された人形浄瑠璃である。この作品は平将門の遺児良門、小蝶と源頼光・頼信兄弟と頼光の四天王の間で繰り広げられる葛藤を、謡曲『土蜘蛛』を絡ませた派手な演出を絡

ませて話題をとった。その物語展開の一角に「楚莊絶纒」の故事が取り込まれている。その梗概を次に記す。

まず第一段から第三段まで。小蝶は兄良門と父将門の仇を討とうと源頼光の館に忍んでいたが、いつしか頼光の弟頼信を恋慕してしまふ。情に走って本懐が揺らぐ。源家の家督定め之夜、暗闇の中で頼平の乳兄弟・箕田二郎纒が酒の三杯機嫌で小蝶に戯れしなだれる不義放埒を働く。咄嗟に小蝶が纒の烏帽子の掛緒をヒ首で切り、「たった今其人を躓さん、女中燭台く」と大声で叫んで犯行を露見させようとする。発覚すれば纒の武士の面目は丸潰れる。この場面に、近松は「楚莊絶纒」を翻案して、次のように挿入する。

上段に御台所頼信頼平両御舎弟、左右に並びおはします、小蝶仰を蒙り、「御籤の次第は各兼て承知の通り、信をこめて取給へ、サア只今火を湿す」……渡部の綱が従弟箕田二郎纒御籤の矢を取る、床脇に座したる小蝶が衣の空薫なまめく香に心ほれほれお広間酒の三盃機嫌、覚ず擦寄りほどけば付寄つて抱き付、小蝶は頼信公へ脇心なき気を見せたく、左の手に烏帽子の掛緒、取てじつと引伸ばし懐中のヒ首抜くより早く結際よりずつかと切り取りて突退け大声上げ「天下大事の御家督定、神前といひ上、の御座近く、暗紛れの不行儀侍、誰かは知らず小蝶に戯れしなだる、不義放埒の曲者印しの為烏帽子の掛緒を切取たり。たった今其人を躓さん、女中燭台く」と呼ばはれば、一座も是はと興醒まし……面々烏帽子の掛緒を探り互の心を疑ひあふ、火を見る迄の纒が身の安否、十方にくらむ弥猛心闇の闇路と成たる所に、頼平君の惻隱の御心に、纒が為の正八幡、人替り給ひけん御声高く、「ヤアく頼平が思ふ子細有り、卒爾に灯上ぐるな、此座の諸武士一人も残らず。自身烏帽子の掛緒を切り、切り揃ふと一度に各声を揃へて案内せよ、其の時灯上ぐべし」と、……も残らず切揃ひ候くと纒も同然に申上れば、灯台燭台ばらばらばら、天の岩戸と開く

れど、一座の武士に疵つかぬ大将の心ぞ頼もしき。幽閑大度の御台所掛緒のことは御沙汰もなく「各取たる御鬪の矢是へく」と御意の内、我もくと御前に差上る（『関八州繫馬』第一）（注12）

この場で頼平が機転をきかし、「卒爾に灯上ぐるな、此座の諸武士一人も残らず、自身烏帽子の掛緒を切れ」と号令した。よって纒は頼平の「大将の心ぞ頼もしき」という思いで窮地を脱する。

この頼平の寛大な処置が後の三段目で、纒の報恩と諫言の死を遂げるといふ伏線になる。その後、小蝶の悪だくみで、頼平はよりよつて頼信の許嫁・詠歌の姫と契り、二人は駆け落ちする。頼信は詠歌の姫の代りに伊予の内侍を娶り、その祝宴の夜、良門は小蝶と頼光暗殺を企てるが失敗、小蝶は殺され、良門はからくも逃走する。頼平らは途中で、良門と出会い一味に加担、一味との盟約こそが武士の名誉だと固執する。そのため兄頼信に捕らえられ、乳母や纒は頼平を翻意させようと努力するが、聞き入れられず、最後は纒の死を賭しての諫めにより、やつと頼平は翻意する。この家督定めの際、頼平に窮地を救われたことを纒は死で報いる、という筋立てが「蒙求」の「後晋与楚戦。有一臣常在前却敵卒勝之。王怪問。乃夜絶纒者也」の記述の翻案となつている。死の間際で纒は述懐し、自分の自己犠牲はあの源家の家督定め之夜の頼平が「仁徳情の御恩の忝さ」に報いたものだといつて自刃する。その心に、討手として来た坂田公時も深く感じ、頼光の四天王に加えて五天王ともなるべき人だとその死を悼む。そして、頼平の首の代りに懸緒の切れた古烏帽子と血刀を頼光に差し出し頼平はその罪を許される。

次に場面は急展開する（第四・第五段）。良門と妖怪土蜘蛛と化した小蝶の源家への復讐戦となる。いよいよ葛城山での最後の決戦の幕が切つて落とされる。渡辺綱ら四天王が葛城山に良門を追い詰める。葛城山は土蜘蛛の精の住み処、背景の穴から蜘蛛の巣を破つて、小蝶の土蜘蛛の精が登場。良門が穴の奥に消えると、大勢の捕り手が土蜘蛛

蛛の精に襲い掛かる。続いて四天王が責めかかる。最後は頼信が投げた刀の奇特により良門、土蜘蛛小蝶は討ち取られる。舞台は大団円で源氏伝承の名剣「蜘蛛切」の奇特に良門、小蝶の神通力は敗れ去り、源氏の末長い世が讃えられる。つまり「楚莊絶纓」は箕田二郎纓の頼平を翻意させるための諫死を誘発する素材となっており、直接的には本筋である頼光と良門・小蝶との合戦譚には関わらない傍流にすぎない出来事にみえる。ではなぜ近松はわざわざこの中国故事を引用したのだろうか。

一応、この話は源家の家督定めの宴の席で、小蝶に対する纓の狼藉が咎められたが、その場にいた頼平の機転で纓の面目は保たれたという場面設定が「楚莊絶纓」を踏襲している。故事では犯人が戦場においてその報恩を果たすのに対し、近松は頼平の不行状を諫死という、いかにも天下泰平期の武士道による命の捨て方となっているという相違点があり、極めて儒教的、道徳的で当世風な筋の運び方となっている。一見この挿話はこれだけのことであるならばあまり効果的と思われないが、次に繰り広げられる場面によって違った様相になる事を見てみたい。

近松のこのドラマは後半部において、良門と妖怪と化した小蝶による「土蜘蛛合戦」のクライマックスが用意されている。しかし、前半部の「楚莊絶纓」とこの後半部は結びつくだろうか。先行研究もこのことを指摘している。

松崎仁氏(注13)は「前半部の「楚莊絶纓」と後半分の土蜘蛛合戦は結びつかない。さらに、なぜ、将門の娘(小蝶)が蜘蛛の妖怪となるのか、このあたりが本作のわかりにくい点の一つである」と。さらに「近松が最後に書いたのは「情」のドラマであって「義理」の悲劇ではない」(注14)ともいっている。これに対し、早川久美子氏(注15)は、頼平ドラマの側面に注視し、「頼光・四天王らが活躍する時代浄瑠璃に、小蝶のドラマを絡ませ二つのドラマを繋げて土蜘蛛退治とした。源家主従の結末と奮闘を中心に描く金平浄瑠璃を作品全体の基

盤にしたものである」と一つの解釈を示しておられる。確かに本作品は前半部の話型と後半部の話型の繋がりが一貫していない。小蝶の個人的恋情ゆえの死と、報復、頼平と纓の君臣関係及び頼光と良門の敵対関係が結びつかないこと、将門と土蜘蛛の関係性のこと、葛城山という戦場は書名の「関八州」と無関係なこと、さらに書名の「繫馬」が将門を意味しているのに、源氏の栄の語で締め括られていること、これらが混然としていて、中国故事との繋がりが不明でよくわからない。「繫馬」は『前太平記』を下敷きにしており、将門遺児の活躍は卷十八の「如蔵尼並平良門事」、卷十九の「平良門蜂起事付多田攻事」に影響されたものである(注16)。このような通俗軍記を取り込んで浄瑠璃の舞台効果を狙い、謡曲「土蜘蛛」(これも卷十七の「頼光朝臣瘡病事付土蜘蛛退治事」にある)の妖気性を孕んだ活劇仕立てにして大衆受けを狙った、とみれば確かに前半部の『葉隠』的武士道とは相容れないものである。

ここは一端、小蝶の「恋と仇討と恨み」という情念の話型から離れて、「楚莊絶纓」に基づく「頼平―箕田二郎纓」と「繫馬の陣幕」に基づく「頼光―良門」の君臣比較から見てみたい。頼平ドラマに注目した見方は先の早川氏と一致はするが、氏の見解からでは、書名の『関八州繫馬』＝平将門とする意味が見えてこないもので、良門に注目し直してみたい。まず、ポイントは、良門が渡辺綱に捕縛され、頼光の面前に据えられ、頼光の恩赦によって助命させられる場面である。

親の恥辱をすすがんだための逆心、しほらし優しいで汝に賜せん。親将門が定紋繫馬の旗印、陣幕源家には無益の長物、汝が為の守り神サア得さするぞ」と、庭上に投給へばおつ取て押戴き「古今独歩の名将と音に聞しに違なし。先祖の遺宝を給はる頼光の大恩、我怨を以報ずべし。是よりすぐに葛城山に立籠り、時を移さず旗を揚げん(『関八州繫馬』第四)(注17)

良門にとって、何より屈辱なのは、将門の「繫馬」の入った陣幕が

無造作に庭に捨てられ、それを拾われたこの場面である。『将門記』には「将門は馬に懼りて風の如くに追ひ攻む。之を通る者は、宛ら猫に遇える鼠の穴を失へるが如し」(注18)「天慶二年十二月十一日を以て、先ず下野国に渡る。各竜の如きの馬に騎る。皆雲の如きの従を率ある。鞭を揚げ蹄を催して、将に万里の山を越えむとす。各心勇み神奢りて、十万の軍に勝たむと欲ふ。」(注19)などと記述されるように馬に巧みであった。巨馬は「竜」(注20)とされ、「王」を象徴する。つまり「将門」馬「新皇即位」は一体と考えてよい。ここに将門「馬の意味が表出されている。つまり、「繫馬」の陣幕が良門の前に投げ捨てられた意味は将門の存在と史実の否定と良門は捉えたのである。

後半部のこの出来事が、頼光の良門に命と自由を与えた「恩情」に對し、彼は「答返し」を決意するという問題を提起する要因となる。これは續の「報恩」とは真逆の決意である。しかも小蝶は「無念の死」を遂げている。小蝶がやり遂げられなかった父・将門の仇討、これが良門に「源氏の情けへの報恩」を「将門血族への義理」に気持を変化させた。つまり本作品の本筋は良門の「義理物語」とよむべきかと考える。「報恩」か「一族への義理」か、という二者択一の中で良門は情に負けず、義理を通す。頼光も覚悟はしていたようである。繫馬の旗印を良門に与えたことになり、戦場での再会を約して釈放したのである。

この切っ掛けが、小蝶の仇討を果たせなかった無念をも止揚し、恩情は仇討を提供した。話は土蜘蛛合戦で大団円に入る。

確かに、小蝶の「恋情と恨み」という個人的情念の世界で土蜘蛛合戦を読み解くと、良門の蜂起には結びつかず、源氏が一門を掛けた戦いとはならない。「義理」なればこそ「関東における源平合戦」という史実を引き寄せられる。先の松崎氏の疑問に「なぜ将門なのか、なぜ土蜘蛛なのか」という指摘があったが、この土蜘蛛とは何だろうか。「土蜘蛛」は『常陸風土記』(注21)「茨城群」に「俗に郡知久母又、夜都賀波岐」という先住民として記されている。土蜘蛛は葛城山が知

られるが、関東にも土蜘蛛がいたのである。ここで初めて、『関八州繫馬』という書名から将門が立ち上がってくる。土蜘蛛合戦は将門が起こした天慶の乱の寓意であると考ええる。

#### 四 平将門と『雲玉和歌抄』

このように近世作品からも「楚莊絶纓」故事の取り込みが江戸庶民の喝采を呼び込んだのは、群雄割拠の時代性、中原の覇者の地域性に富んだドラマ仕立てに「将門」が立ち上がってくるからである。このような見方から『雲玉抄』の詞書に『和漢朗詠集』の一文が添えられたということは「楚莊絶纓」の解釈に、納叟馴窓にある思いが感じられるのである。それは「答犯」のエピソードから引き出される「出処進退」という武士の身の処し方である。このことは二の章で深く言及しなかつたので、ここで考えておきたい。その一文は次のとおりである。

范蠡收責句踐 乘偏舟于五湖 答犯謝罪文公 亦逡巡于河上 後漢書『和漢朗詠集』七五二(注22)

『和漢朗詠集』は『後漢書』からの引用である。その題意は「范蠡は呉を滅ぼしたが五湖に舟を浮かべて去った。答犯は文公を晋王に据えんと身を引いた」というもので、古の賢人は出処進退を誤らなかつたことを述べている。

長安中亦起兵誅王莽、蠶遂分遣諸將、徇隴西、武都、金城、武威、張掖、酒泉、敦煌、皆下之。更始二年、遣使徵蠶及崔・義等。蠶将行、方望以為、更始未可知、固止之、蠶不聞。望以書辭謝而去、曰、足下、(中略)今俊父並会、羽翮並肩、望無奢着之德、而猥託賓客之上、誠自愧也。雖懷介然之節、欲挈去就之分、誠終不背其本、貳其志也。何則、范蠡收責句踐、乘偏舟於五湖。答犯謝罪文公、亦俊巡於河上。夫以二子賢、勒銘兩国、猶削跡歸愆、請

命乞身、望之無勞、蓋其宜也。(後略) (『後漢書』列伝一「隗囂  
公孫述列伝第三」)(注23)

この『後漢書』は『春秋左氏伝』「伝廿四年」を下敷きになっている。

子犯以璧授公子曰、臣負羈縲、從君巡於天下、臣之罪甚多矣。臣  
猶知之。而況君乎。請由此逃(『春秋左氏伝』「僖公伝廿四年」)(注  
24)

子犯(咎犯)は公子(重耳・晋の文公)の他国への亡命、放浪を支  
えた重臣であったが、亡命の間数々の無礼を働いた由に身を引く、と  
いう故事である。そこに『後漢書』は一文が前置きされ、「堅固な節  
度をもつて忠義に務め二心はないのだが、一方で君子を厳しく諫めた  
非礼は免れない」と出処進退に悩み、「請命乞身」と命乞いをしたこ  
とを記している。『雲玉抄』は詞書に「朗詠に、咎犯罪謝文公、逡巡  
河上」と一文を添えた訳だが、なぜ、唐突に、咎犯が出てくるのだろ  
うか。そして、「楚莊絶纒」とどんな関連があるのだろうか。

この解釈を廻つては先行研究がある。矢口祐子氏はこの本節を廻つ  
て以下のように整理しておられる(注25)。「咎犯」の名があることに  
ついては次のように説明する。①この咎犯の名は、蒙求諸本の中には  
みられない。②この咎犯の名は『春秋左氏伝』にある。「孤偃、子犯  
の名でその記述があり、中国春秋時代の晋の政治家。晋の公子重耳が  
陰謀により出奔を余儀なくされた時、重耳につき従つた臣下の一人で  
ある。長年に渡る旅の末、やっと晋に戻るといふ時に、重耳に旅の中  
での非礼を謝罪し、それを理由に晋に戻らず去つた」とある。(『春秋  
左氏伝』「僖公伝二十三年〜二十有四年」)

さらに『雲玉抄』が『蒙求』題の中に『和漢朗詠集』を本説に組み  
入れていることについては次のように説明する。③『和漢朗詠集』述  
懐部七五一に咎犯の名がある。『和漢朗詠集仮名注』に類似した話型  
があり、そこから『雲玉抄』は部分的に取り込んでいる。④『和漢朗

詠集仮名注』では晋の文公の宴席で后の手を取つたのは咎犯である。  
⑤楚が乱入してきて、咎犯は一人防戦、公を助けた。⑥咎犯は宴席で  
の公の恩に報いたままで、罪は罪として河上で逡巡した。

咎犯カコト、古へ、晋の文侯、数千人ノ臣下ヲ召具シテ、夜ヲ宴  
ス。灯ヒ消コトアリ。其中ニ、一リ后キノ御手ヲトル。后、其纒  
ヲ取テ、王ニ訴フ。冠ノ無ラン者ヲ罪スベシトノ玉フ時ニ、王憐  
テ、臣下冠ヲ皆召す。……其後、楚ノ城ヨリ大軍乱入ル。……  
咎犯一人、防軍、王扶。……咎一申サク、今此忠ハ、前ノ夜ノ宴ニ、  
罪ヲ遁シ玉フ、其恵ヲ報す。今ノ忠ニアラスト申シテ、河上ニ逡  
巡セリ。(『和漢朗詠集仮名注』)

つまり、衲叟はこの『仮名注』を参照して創作した可能性を、氏は  
指摘しておられる。

『雲玉抄』には他にも詞書や左注の随所に『和漢朗詠集』を引用、  
それを本説としているので氏の指摘どおりに引用はまちがいないと思  
われる。しかし「咎犯は晋の文公の臣下であるにもかかわらず楚の莊  
王の臣下としたので馴窓が咎犯について正確な知識をもっていなかつ  
たことは明らかである」と批判しておられるが、衲叟に対するこの批  
判について、単純に咎犯が仕えた相手を文公ではなく、楚の莊王と間  
違えた、という考察には一考する必要がある。このエピソードは古く  
から本朝に撰取され、楚の莊王の説話としてよく知られているもので  
ある。単純ミスとするのは早計ではないか、すぐに、歌壇の面々から  
間違いの指摘は受けるはずである。これは衲叟独特の「楚莊絶纒」へ  
の意図的な付加であると思うのである。

それはこの歌会の性格やそれを主催した千葉勝胤の意図、勝胤の千  
葉氏の来歴に関わる基底を衲叟は考えたからである、と考えてみた。  
基底とは歌会の地、本佐倉城が「将門山」に築城されたことと関係す  
る。そもそも千葉氏の祖というのは 関八州に覇を称えた東国武士で  
桓武平氏の血筋を持つ名族である。『雲玉抄』の「序文」に次のとお



りある。

平のなながしと申したてまつりて弓馬の家にすぐれ、威を八州にふるひ、諸道に達して政を両総にをさめ、中にも大和歌にこころをよせて佐倉と申す地にさきくさのたねをまき給ふ、誠に桓武の御すえ平安のみやこをあらためたまひて、此所天ながく地ひさしと見えたり(『雲玉抄』)

千葉氏が編纂に関わったと思われる平家物語異本の『源平闘諍録』には次のような記述がある。

将門妙見の御利生を蒙り、五ヶ年の内に東八ヶ国を打ち随へ、下総国相馬郡に京を立て、将門の親王と号さる。然りながらも、正直詔佞と還つて、万事の政務を曲て行ひ、神慮をも恐れず、朝威にも憚らず、仏神の田地を奪ひ取りぬ。故に、妙見大菩薩、将門の家を出でて、村岡の五郎良文の許へ渡りたまひぬ。(『源平闘諍録』「妙見大菩薩の本地の事」)(注26)

将門は妙見大菩薩の神慮で関八州を平定したが、神慮に背いた政を働いたために将門は妙見に捨てられ、滅んだ。妙見は村岡良文の許へ移った。この村岡良文こそが千葉氏の祖となるのである。将門の血統については将門自身の言葉で次のように語られている。

伏して昭穆を案ずるに、将門已に柏原帝王の五代の孫なり。縦ひ永く半国を領せむに、豈運に非ずと謂はむや。昔、兵威を振るひ天下を取る者、皆史書に見る所なり。将門、天の与へたる所は、既に武芸に在り。思ひ惟るに、等輩誰か将門に比ばむ。(『将門記』)(注27)

これは将門が天慶二年に関東で新皇宣言したあと、かつて京に出仕し

ていた頃、主従関係にあった太政大臣藤原忠平に差し出した上申書で、自ら、まぎれもなく桓武天皇の五代の孫だ、と称したものである。系図では、将門は良文の兄・良将の子となる。良文は染谷川の戦いでは将門に味方して妙見大菩薩の加護で窮地を脱している。その末裔が歌会の主催者千葉勝胤である。結果、千葉氏は妙見神を氏神とした。そして、歌会の開催地と考えられる勝胤の居城・本佐倉城は将門神社を祀った「将門山」(注28)に築城されている。この因縁は、勝胤の佐倉歌壇では共通認識としてあったであろう。文字化されていない将門の影響下に「楚莊絶纓」題は出詠されたと考えられるのである。ちなみに、千葉氏重臣の多くは平将門と血縁を持つ武将たちなのである。

それでは『源平闘諍録』にある「神慮をも恐れず、朝威にも憚らず」とある将門の行動とは何であったのだろうか。『将門記』に次のような記事がある。

新皇宣言に対して舎弟の将平らが「夫れ帝王の業は智を以て競ふべきに非ず。復た力を以争ふべきに非ず。此れ尤も蒼天の与ふる所なり。」と諫言したとある。これに対し、将門は「今の世の人、必ず撃ちて勝てるを以て君と為す」と言つて、諫言は迂遠な空論だと退けている。さらに小姓の伊和員経までもが「耆婆の諫を信じて、全く推悉の天裁を賜へ」と助言する。これに対し、「口に此の言を出だせば、駟馬も及ばず。所以に言に出して遂ぐるることなからむや」と一度口にしたからはやるしかない、と聞き入れていない(注29)。これは将門の驕りを表したものである。結局は上申書による忠平への弁明も効を奏さず、本天皇(朱雀天皇)の「彼の賊難を払ひたまへ」との詔を招いてしまうのである。そして、最後の戦場において「新皇甲冑を着て、駿馬を疾めて躬自ら相戦ふ」と将門自ら陣頭に立った為、鎬矢に中つて落命する。

『将門記』の作者は、「少過を糺さずして大害に及ぶとは。私に

勢を施して將に公の徳を奪はむとは。仍て朱雲の人に寄せて、長鯢の頸を刎る(注30)と小さな過ちを正さず、武に頼ったことが滅亡の原因だとしている。將門は、主は「天」であることを思い知り、諫言に耳を傾け、出処進退を決める謙虚さが求められていたのである。

北村季吟、西生永済の『和漢朗詠集註』によれば「咎犯」の記事は「范蠡・咎犯ごときの忠臣も、君の誅を恐れしことをいう文也」(注31)と解説があるように、咎犯もこのまま君主について晋に戻れば、君主放浪時代の非礼の咎を受け、誅伐される恐れがあった、と解釈されている。つまりこの中国故事にはたとえ忠臣であっても出処進退を誤まれば誅伐される、という意味が込められているのがわかる。あくまで君は天であつて、將門は范蠡・咎犯の立場ではない。

『蒙求』の「楚莊絶纓」の「君主の恩情と報恩」の故事に『和漢朗詠集』による「咎犯の出処進退」を付け加えることで、盟主勝胤の意図を汲んで、参加した佐倉歌壇の構成員である千葉氏家臣団(注32)を妙見神の下に結集し、結束を引き締めようとする衲叟馴窓の創意があつたと考えられるのである。

## 五 おわりに

このように中世期の文学の中には、様々な付加や再解釈を施して話を膨らませることが行われてきた。特に、平將門は東国武士たちにとって、極めてドラマチックな武士である。この創意は近世期にはさらに高度化、複雑化してきたことが『繫馬』の例から見取れる。それは、中世期の文人にとっては戦国意識を引き出すための工夫であるの対し、近世期は筋や異ジャンルからの引用という技術的、舞台的効果を狙つたものという違いである。

単独で京都の王権に立ち向かい、独立自尊の関東武士の精神を「新皇宣言」という形で成し遂げた將門は、たとえ賊徒と貶められようとも忠義・智謀・武勇の武士の徳目は階級を超えて畏敬されてきた。

一方、「出処進退を誤るな」という命題は千葉氏にとって、氏神的

存在である將門はもはや天地に浸透しており、共通認識となっていた。先に示したように『源平闘諍録』の將門は天意に背く行動があつたから妙見神の庇護が離れたとあり、出処進退の誤りが天命の誅伐を受けた反面教師でもある。

「楚莊絶纓」にみせたような衲叟馴窓の創意は『雲玉抄』にはよくみられる現象で、それは東国戦乱で獲得した自身の体験や知恵を反映させて、座の歌人たちの共感を引き寄せる工夫だったかもしれない。ただ、歌壇主催者である千葉勝胤は『雲玉抄』が編纂された永正十一年当時、内憂外患の状況(注33)にあつた。家臣団の引き締めこそ喫緊の課題であつたはずだ。

衲叟馴窓は「出処進退」を窺わせて、千葉氏の支柱である將門を想起させ、家臣団に共通するそのような認識に訴えかけるように「楚莊絶纓」を出詠したのではないかと考えるものである。

### 注 釈

- (1) 足利学校の漢籍の講義は文安三年(一四四六)段階(規式という校則を制定)で「三注(千字文集註、古注蒙求、胡曾詩註)、四書、六経、列子、莊子、老子、史記、文選でなされた」とある。(『栃木県史』資料編中世三による)
- (2) 『新編国歌大観第八巻 私家集四』(雲玉抄)角川書店一九九〇…本論の「抄」の本文は『新編国歌大観』(神宮文庫蔵本を底本)によつた。伝本はその他に、京都大学附属図書館本、国立公文書館内閣文庫蔵本、島原図書館松平文庫蔵本、ノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵本、中川芳雄氏蔵本(恋部・雑部のみ)、山中義貞氏蔵本(拔書)、八州文藻所収本(序のみ)などの写本が知られる。本文に関しては諸本間に大きな異動はみられず、ほぼ一系統である。(同解説より)
- (3) 松崎仁(等)校注『近松浄瑠璃集下・関八州繫馬』(新日本古典文学大系九十二)岩波書店一九九五 享保九年(一七二四)一月に大坂竹座で初演された。書名の「関八州」は將門が統治し「新皇」を称した独立王国を指し、「繫馬」は將門の旗印を示している。
- (4) 編者は出自不明の歌僧・衲叟馴窓で、その名前から禪僧と思われる。『雲玉抄』は全五八一首中の二八〇首近くが自詠歌(内「衲叟」記述のあ

- (5) 答犯(きゅうはん)・中国春秋時代の晋の政治家。狐偃(こえん)、子犯。舅犯、答犯の名がある。晋の重耳に仕え、重耳の放浪に同行した。重耳の放浪は十九年に及んだが晋に帰国して文公となった。答犯は君主に諫言した非礼を詫び、晋に帰らなかつた。『三国志演義』で董卓が吕布の不貞を許すにあたって「楚莊絶纓」の故事が引かれ、莊王の後に無礼を働いたのは「蔣雄」(しょうゆう)だとしている。
- (6) 池田利夫編『蒙求古註集成 中巻』及古書院 二〇〇〇 「国会図書館蔵大永五年書写本」九十五～九十六頁 蒙求本文は注の内容によって八世紀前半の古注本(李瀚注)と十六世紀伝来の補注本(南宋の徐子光注)などに分かれるが、衲叟馴窓が参照したのは古注本である。
- (7) 『説苑』(ぜいえん)は、前漢の劉向の撰ないし編による故事・説話集で全二十巻、上古から漢代に至るまでの多くの書物から天子を戒めるに足る逸話を採録し、時の成帝を諫めるべく上奏されたものとされている。原文の引用は池田秀三著『説苑 知恵の花園』講談社一九九一 一三四頁。
- (8) 『唐物語』第二十二「楚の莊王、後に無礼を働きたる家来を咎めざる語」(小林保治編著『唐物語全釈』笠間書院 一九九八)
- (9) 『新編国歌大観』巻十 歌合編二 角川書店 一九九二
- (10) 『十訓抄』(新編日本古典文学全集五十一) 小学館 一九九一 四八五頁
- (11) 『古今著聞集』(新潮日本古典集成五十九) 新潮社 一九八三 四〇六頁
- (12) 『近松浄瑠璃集下』(新日本古典文学大系九十二)「関八州繫馬第一」三六八頁
- (13) 松崎仁著「関八州繫馬脚注余滴」『日本文学研究』梅光女学院大学日本文学会 三十一号 一九九六 六十八頁
- (14) 市古貞次編『日本文学全史四近世』学灯社 一九七八 第四章第一節
- (15) 早川久美子著「関八州繫馬」源頼平のドラマ―源家主従の結束と奮闘をめぐって―『日本文学協会』『日本文学』六十八巻四号 二〇一九・四 七十二頁
- (16) 板垣俊一校訂『前太平記上』(叢書江戸文庫三) 国書刊行会 一九八八 三七八～三八六頁
- (17) 『近松浄瑠璃集下』(新日本古典文学大系九十二)「関八州繫馬第一」四四四頁
- (18) 柳瀬喜代志「等」校注・訳『将門記「ほか」』(新編日本古典文学全集四十二) 小学館 二〇〇二 四十三頁
- (19) 右同六十頁
- (20) 「馬八尺井以上為龍、七尺以上為驥、六尺以上為馬」(本田二郎著『周礼通釈下』秀英 一九七九 一七五頁) 大きな馬は「龍」と称されていた、とある。
- (21) 久保田昌子著「常陸風土記における土蜘蛛伝承の検討」『駒沢史学』九十三号 二〇一九・一二 二一七頁
- (22) 『和漢朗詠集』(新編日本古典文学全集十九) 小学館 一九九九 三九二頁
- (23) 『後漢書』第三冊列伝一(巻一～巻十二) 岩波書店 二〇〇二 「隗囂公孫述列伝第三」 九十九頁
- (24) 『春秋左氏伝一』(新釈漢文大系三〇) 十九版 明治書院 一九九八 「僖公伝廿四年」三七〇～三七二頁
- (25) 矢口祐子著「雲玉和歌抄における蒙求和歌」日本女子大学国語好文学会『国文目録』四十五号 二〇〇六 七十一～七十三頁
- (26) 福田豊彦、服部幸造訳注『源平闘諍録―坂東で生まれた平家物語(下)』講談社 二〇〇〇 『平家物語』の異本。延慶本に近い形態で、『平家物語』読み本系諸本の中では珍しく漢文表記(真名本)であり、巻一上下、巻五、巻八上下のみが現存している。他の『平家物語』諸本と比較し平将門、千葉氏など坂東八平氏の武勳物語や妙見信仰に関する大幅な改作が見られ、その内容から後世のある時期に特定の目的をもって述作されたものと推察できる。このことから、坂東八平氏ひいては千葉氏宗家の系譜の正当性を主張し一族の再結集を図るため千葉氏関係者によって書かれたもの、とする見解が近年有力となっている。
- (27) 『将門記「ほか」』(新編日本古典文学全集四十二) 六十六頁
- (28) 『将門山』…「将門山(まさかどやま)」一帯は将門の父・良将(良持)が陸奥鎮守府将軍であった根拠地である。将門を滅ぼした藤原秀郷が崇りを鎮めるために建立した将門大明神(将門神社)を祀ったという由来がある。千葉県印旛郡酒々井町本佐倉と佐倉市大佐倉にまたがる山稜に文明年間(一四六九―一四八五年)、千葉輔胤によって本佐倉城の築城が着手された。輔胤は宗家の地位を確保すると拠点を亥鼻城から印旛沼畔の将門山に移転した。今も、将門山大明神鳥居(佐倉市将門町)が立ち、佐倉惣五郎の崇りを鎮めるために本来の将門神社に合祀された名残りであろうとされている。(川尻秋生著『将門記を読む』吉川弘文館 二〇〇九 一八一頁) また、『角川日本地名大辞典』千葉県「角川書店 一九八四刊の「将門町(まさかどやま)」の項目に、

- (29) 「当地名の由来は平将門を祀る将門神社のあった将門山による」とある。  
『将門記「ほか」(新編日本古典文学全集四十二)』 六十八～七十頁  
(30) 『将門記「ほか」(新編日本古典文学全集四十二)』 八十三頁  
(31) 『和漢朗詠集註(『北村季吟古註釈集成二十四和漢朗詠集註下』)』新典社 一九七九 二四〇頁  
(32) 千葉氏家臣団・『雲玉抄』には幡谷加賀守胤相・粟飯原民部少輔信尊・海保丹波守幸清・円城寺道頓(武蔵千葉氏の旧臣)などの歌を収録している。いづれも千葉氏の重臣の家柄。(千野原靖方編著『戦国房総人名辞典』命書房 二〇〇九)  
(33) 千葉勝胤の本佐倉城の周囲は、東部戦線に真里谷武田氏の攻勢、西部戦線に立河原合戦の武蔵千葉守胤からの敗北、南部戦線に足利義明の小弓公方樹立、北部戦線に古河公方足利政氏と子の高基の主導権争い、という外患状況にあった(『千葉県の歴史 通史編 中世』八三三～八三七頁、一一九二～一一九九頁)。これは戦国時代の本格的幕開けを意味していた。とりわけ勝胤の下総千葉氏は康正元年(一四五五)の「千葉氏内訌(下総千葉氏の祖である馬加康胤が千葉胤直を敗死させ宗家を篡奪した戦い)」を経た政権であるという内憂を抱え、盤石な基盤が求められていたと考えられる。